

Title	治癒の病理：歯科臨床と基礎の接点を求めて
Author(s)	下野, 正基
Journal	歯科学報, 110(4): 486-486
URL	http://hdl.handle.net/10130/1992
Right	

特別講演 3

治癒の病理－歯科臨床と基礎の接点を求めて

東京歯科大学病理学講座教授 下野 正基

私の約40年間の研究生活を振り返って見ると、「臨床の疑問に基礎が答える」という展開が主体であったと思う。優れた臨床家との議論を通じて、臨床の疑問から多くの研究テーマが生まれ、研究結果の中に次の疑問が出てくる、の繰り返しであった。

最初の大きな疑問は、歯周治療後の歯肉にプローブは入らないがシルバーポイントが入るスペースがある。その中はどうなっているのか？であった。これが長い付着上皮による上皮性付着の研究のはじまりであり、時間の経過に伴って長い付着上皮が短小化し、上皮性付着が結合組織性付着に置換されることがわかった。さらに、長い付着上皮はラミニン-5およびインテグリン $\alpha_6\beta_1$ によって歯根と接着していることから、上皮性付着は安定した治癒形態であろうと考えた。この間、付着上皮はなぜエナメル質と接着できるのか？ラミニンやインテグリンはどこからくるのか？エナメル表層の細胞は接着しているのになぜ遊走できるのか？などの疑問に挑戦してきた。歯肉切除後の上皮の再生過程でも接着タンパクが発現すること、創面に4-METAレジンを用いると、再生上皮とレジンとの間にラミニン-5およびインテグリン $\alpha_6\beta_1$ が発現すること、などから4-METAレジンを用いた歯周外科での応用の可能性を示唆することができた。

歯周組織再生における歯根膜の重要性は、結合組織性付着を獲得するためのみならず、歯の移植・再植を積極的に実施する臨床家から多くの疑問を頂き、興味深い研究を行い、実りある議論をすることができた。矯正学的歯の移動や移植・再植後に、歯根膜の幅が一定に維持される機序について（私なりの仮説を立てているが）、証明するには至っていないのが残念である。

また、近年の接着歯学の発展と象牙質・歯髄生物学の新展開には目をみはるものがある。私達は、研究者も臨床家も一堂に会する2回の「象牙質・歯髄複合体」の国際シンポジウム（1995年と2001年）を千葉で開催し、この概念の国際的な浸透・定着に貢献できたものと自負している。

《プロフィール》



＜略歴＞

昭和45年3月25日 東京歯科大学卒業
昭和45年6月22日 歯科医籍登録（第58365号）

昭和49年10月1日 ミラノ大学医学部薬理学研究所客員
研究員（昭和51年4月30日まで）
昭和51年9月30日 学位受領（歯学博士）東京歯科大学
昭和57年9月1日 死体解剖資格認定（第4328号）
平成2年4月1日 日本病理学会認定口腔病理医（第30号）
平成3年4月1日 東京歯科大学病理学講座主任教授
（現在）

＜非常勤講師（現在）＞

九州大学歯学部、大阪大学歯学部、広島大学歯学部